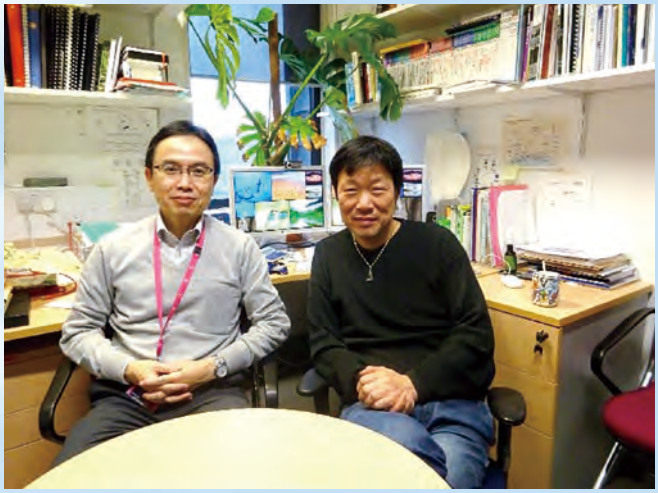
所長よりご挨拶

夢を語ろう!

昨年11月、ロンドンでのシンポジウムに参加した後、世界的に著名ながん研究機関として知られるCancer Research UK Cambridge Instituteに立ち寄った。Cancer Research UKは、英国の慈善団体(Charities)であり、国内に4つの研究所を持つ。そのひとつが、Cambridge Instituteである。研究所は、ゲノムやバイオインフォマティクスに強く、世界的に顕著な実績を有する研究者が多く在籍している。そのPIの一人である成田匡志氏を訪ねた。成田氏は、Cold Spring Harbor Laboratoryを経て、2006年よりPIとして着任し、以後、細胞老化および個体老化に関して、オートファジーやクロマチン動態制御などの観点から優れた研究成果を継続的に発表している、その筋では名の知れた研究者である。10年ぶりの再会であったが、氏は以前と変わりなく、気さくに、気負うことなく、しかし情熱的に進行中のプロジェクトについてどんどんと語ってくれた。印象的であったのは、老化という自身の一貫したテーマを、エピジェネティクスやバイオインフォマティクスなど最新の技術で解析することはもちろん、異分野の意外な技術を用いて新しい領域に切り込もうとする意欲が極めて高いことであった。ある種の“夢”を語るのである。研究者にとっての“夢”は、10年後の現実であり、その学問領域の中心にいるのは自分であるという明確なイメージである。彼は、次々と夢を語る、それを聞いているうちに、果たして自分は夢を語っているか、自問せずにはいられなかった。現実になるかはわからない、しかし、それを言葉にすることが大事である。具体性をもって新しい概念を生み出すこと、普遍性があり革新的な新技術を生み出すこと、明るい未来をどれだけたくさん語れるのか、優れた研究者に必要な資質であり、それを楽しむことこそ、研究の醍醐味といえる。夢を自由に語り合える雰囲気が身近にどれだけ存在するか、将来を担う若い学生や研究者を育てる上で最も重要な要素であろう。自分の夢について考えながら帰途につく、気持ちのよい旅となった。

平成31年3月
金沢大学がん進展制御研究所
所長　平尾　敦

Cancer Research UK Cambridge研究所玄関にて
(左:成田氏、右:筆者)


成田氏のオフィスにて